

新しいアクティブラーニング教室によるグループ学習の試み

石川千温

Email: chiharu@sgu.ac.jp

札幌学院大学 経営学部 経営学科

◎Key Words アクティブラーニング, グループ学習, 能動的学習

1. はじめに

2012 年に出された文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」⁽¹⁾では、「答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力等の認知的能力」、「チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う、倫理的、社会的能力」等を地域社会や産業界が求めている人材に必要な力として、これら能力を培うことが大学に課せられた使命と位置付けている。その一つの解決策として、ディスカッションやグループワークを中心とした双方向型で学生の主体的、能動的な学びの授業のモデルが示されている。

本学は、これまでこの能動的学習の要素を主にゼミナールやフィールドワークで十分に補えると考えてきた。しかしながら、ゼミナールにおいても、本来は他者と議論したり、協調したりしながら問題を解決していくという理想とは大きく異なり、多くのゼミナールで教員対学生の 1 対多の関係性が築かれ、本来の目的とするところの学生間や教員を巻き込んでの多対多の関係性の構築がなされていない実態がある。そこで、小樽商科大学が初年次から通常の講義の中でグループ学習を採用し、それに合わせた設備等の充実に注力している実践例⁽²⁾を参考に、本学も平成 25 年度私立大学等改革総合支援事業補助金を活用して、2つの異なる型のアクティブラーニング教室を整備し、通常の授業の中でグループ学習主体の授業を増やす目標を定め、実際に今年度から稼働を開始しているため、その取り組み状況を報告する。

2. アクティブラーニング教室

2.1 情報機器活用型教室B201

整備した2教室のうち、こちらの教室 (B201)の基本的なコンセプトは、最大 60 名程度のグループ学習を想定し、各グループはタブレット PC などの情報機器を駆使しながら、グループ内ディスカッション、他グループとのグループ間セッション、発表等の全体セッションを有機的に行うことができる教室、とした。また、これらの活動を教室外の廊下からも見えるように壁をくり抜き、そこをガラス張りにした。さらに既存の階段教室の後ろ部分の席をそのまま 50 席ほど残し、学生のグループ学習の活動の様子をイベント等の外来者が観覧できるようにした (図1)。

2.2 少人数対応型教室A215

こちらの教室 (A215) は、30 名以下の少人数の授業を対象とした教室で、ゼミナールや演習、語学などのペアワーク、グループワークで利用しやすい構成とした。情報機器としては、教室前後の壁一面に設置された電子黒板機能付きホワイトボードだけであり、学生の椅子を折りたたみテーブル付きとして、キャスター付きで自由に移動できるものを採用し、情報機器を活用しながらも学生間の対面のコミュニケーションを重視した授業展開ができるようにした。



図1 B201 アクティブラーニング教室

2.3 導入した情報機器

これら2つの教室に整備された情報機器を表1に示す。A215 教室での情報機器は主に教員が自ら持ちこむPCやタブレットPCでの利便性を考えたものであり、必要最小限にとどめている。

表1 各教室の導入機器

教室	機器	台数
B201	短焦点プロジェクタ+メインホワイトボード+電子黒板	2
	短焦点プロジェクタ+小ホワイトボード+電子黒板	8
	コラボステーション	1
	書画カメラ	1
	iPad mini	10
	Windows ノートPC	8
A215	短焦点プロジェクタ+メインホワイトボード+電子黒板	2
	Wivia	2
	codemari	1
	codemari	1

3. 主な情報機器の活用

3.1 codemari

情報機器を多用した場合、それらを統一的にコントロールするには複雑な配線や面倒な操作盤を操作する必要があるが、codemari はそれらを iPad と無線 LAN 環境の組み合わせで直感的に操作できるようにしたものである。PC や映像の切り替え、音声、照明などが iPad 一台で実現できる。これは 2 教室に整備された。

3.2 小ホワイトボードとコラボステーション

B201 教室は 5、6 名を 1 グループとして、各グループにディスカッションやプレゼンテーションのための情報端末として iPad mini や Windows ノート PC を配り、各々のグループの議論の経過や結論を全体に報告するという授業の流れを想定している。そのため、各々の議論のプロセスや情報検索の結果などは個別のホワイトボードを利用して、情報端末を一人で独占しないようにしている。また、議論の結果やプロセスを全体へ報告する際には、各端末から wivia を使って、無線 LAN 経由でプレゼンテーション資料を投影する方法も用意しているが、より簡便にクラス全体に周知する機器としてコラボステーションがある。

コラボステーションは、各々の iPad mini にインストールされた Visual Sync というアプリを通じて、無線 LAN 経由で、各 iPad mini 上に書かれたフリーハンドの文章や撮影した写真、図などを集約し、その集められた情報を教員が任意のプロジェクタへ簡単な操作で投影することができる。これにより、各々のグループの考え方や意見の相違を教室全体で共有することが簡単にでき、教員は講義の方向性を修正したり、新たなテーマ設定などが臨機応変にできるようになる (図 2)。



図 2 コラボステーションの使用例

4. アクティブラーニング実践事例

教室整備が整った 26 年度前期においては、B201 教室の稼働率は 8 割、A215 教室は 7 割であり、その他空いている時間帯も学生らが発表練習のために使用したり、サークル活動などで使用したりすることも多い。

著者が担当している経営学部専門科目「メディア応用論」(履修者 105 名、3、4 年生対象) は 2011 年度からグループ学習主体の授業に転換し、これまでは階段教室で実施してきたが、今年度からこの B201 教室で同授業を実施している⁹⁾。履修者数は想定 60 名よりはる

かに多いが、欠席者が一定数存在することと、教室の階段部分を利用することを許容して、実施に踏み切った。

これまで (6 月 9 日時点) ガイダンスを除いて 8 回の授業が行われたが、そのうち、iPad や Windows ノート PC を実際に配り、グループ毎に作業プロセスを小ホワイトボードに投影しながら行った事例は 1 回、コラボステーションを利用した事例は 5 回で、その他は、グループの発表資料を A4 紙ベースで作成させたものが 2 回である。本来想定していた小ホワイトボードを活用し、各々のグループが討論プロセスを投影するという方法は、履修者数が多く教室が狭いため、教室内のホワイトボードの配置に苦勞し、想定した通りにスムーズに進めなかった (図 3)。また、実際に使用してみると Windows ノート PC は 14 インチのディスプレイなので、4、5 人のグループであれば十分に全員が視聴可能であることがわかったので、次回にはその点を考慮して行う予定である。



図 3 情報機器を活用した授業実践例

5. おわりに

アクティブラーニングの普及を目指して、まずは 2 教室の導入を決定し、この 4 月から運用を開始した。導入時には簡単な学内説明会を開き、利用マニュアルも用意したが、本当に有用なノウハウをこのような説明会などで垂直展開することは難しく、やはり利用している教員間の水平展開が有効と思われる。実際に運用すると導入時の想定と異なる状況が各々の授業で発生するので、今後多くの教員のそれらに対する試行錯誤や成果事例を学内で水平的に共有することが、このような教育環境を有効に使う近道であろう。

参考文献

- (1) 文部科学省中央教育審議会：“新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～”，文部科学省中央教育審議会 (大学分科会) 答申，文部科学省ホームページ (2012)。
- (2) 大津品：“小樽商科大学のアクティブラーニング実践事例と課題”，札幌学院大学 FD 研究会資料，札幌学院大学 FD センター (2014)。
- (3) 石川千温：“能動的学習を促すための授業改善の取り組み - ICT の利用と教室整備 -”，第 1 巻，pp.33-41，札幌学院大学総合研究所 (2014)。